

紀 要

第 20 号

2007. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

彦根市大堀町大堀山採集の埴輪について

辻川 哲 朗

1. はじめに

近江地域の埴輪資料については、以前に集成を行い、その編年的位置づけを検討したことがある(辻川2003)。そのさい資料化がなされていない事例がいくつか見受けられた。その多くは埴輪の出土という点については周知されているものの、その内容について詳細な報告がないというものであったが、なかには埴輪の出土したいが周知されていない例もあった。

丘陵部の古墳の場合、埴輪が採集されたことにより古墳の存在が明らかとなることが多いため、採集された埴輪が資料化(公表)されないと、古墳そのものが周知の埋蔵文化財包蔵地として認識されず、研究上においても埋蔵文化財保護上においても、見捨てられた状態に置かれることになってしまう。

こうした問題意識から、近江地域の出土埴輪について、情報の共有化を目的とした基礎的な資料化作業の必要性を感じていた。本稿はその試みのひとつであり、彦根市大堀町大堀山出土埴輪を取り上げることにしたい。

2. 報告の経緯

本資料の存在を知るに到った経緯について簡単に触れておきたい。その端緒は滋賀県埋蔵文化財センターに保管されていた『大堀山遺跡出土埴輪計測表』(滋賀県教育委員会文化財保護課)と題された小冊子を偶然見出したことにある(以下、『計測表』と略称する)。本冊子は埴輪の黑白写真6葉(2頁)と計測表3頁からなるもので、埴輪の写真には個々の破片に番号が付してあり、計測表と対応している。計測表には埴輪番号とそれぞれの破片の遺存長・遺存幅が表記されているが、それ以外の記述はなかった。

その時点では『計測表』に対応する埴輪の現物を検索し得なかったため、本冊子からそれ以上の情報を知ることができなかった。その後、機会があるごとに現物の探索を続けていたが、『計測表』の写真と対応する埴輪資料を滋賀県埋蔵文化財センター収蔵庫内においてようやく見つけ出すことができた。

このような記録が作成されたことからすれば、その段階には遺跡として当然認識されていたはずである。しかしながら、『平成13年度 滋賀県遺跡地図』(滋賀県教育委員会編2001)には該当する遺跡は掲載されておらず、またそれ以前の各種遺跡地図においても掲載が確認されないことから、これらの出土の経緯や出土埴輪の内容については、何らかの事情により、正式に公表されることはなかったようである。

3. 埴輪の内容(図1)

数量と内容 採集埴輪は、整理用コンテナ約0.5箱弱程度である。埴輪は円筒埴輪が主体で、若干の形象埴輪と思われる破片がある。今回はこれらの中から主要な破片について図示した。

円筒埴輪 確実な朝顔形埴輪は確認できない。胎土はいずれも緻密で、焼成は大半が外面に黒斑を欠く無黒斑土師質焼成であるが、灰色を呈する須恵質焼成品もみとめられた(11)。前者については、軟質のものと比較的緻密に焼成されたものの両者が認められる。

最も大きな破片である11に基づく、復原しえた各部の寸法は、底部16.4cm、体部径(第1段突帯下)20cm程度、底部高12.5cmである。11は底部外面下半に底部調整の板オサエ痕跡を残す。9・10も底部片であるが、11と同様に、外面はタテハケ調整の後に底部調整の板オサエ痕跡が残る。

突帯はいずれも低平な断面台形である(3~6)。突帯の貼り付けはナデによるが、断続ナデ技法ではなく、通常の貼付方法である。外面調整はタテハケ調整を基調としており、確実な二次調整は確認できなかった。タテハケのハケ密度は9~10本/cm程度であり、比較的細密な印象を受ける。内面はナデ調整を基調とする。

口縁部片は1点のみ確認できた(1)。1は普通円筒埴輪の口縁部片と思われるが、端部外面付近に幅2.5cm程度の粘土帯を貼り付けたいわゆる「貼付突帯口縁」である²⁾。粘土帯には指頭によるへこみが接続して残っていることが特徴的である。この破片については、内面にヨコハケ調整が認められる。口縁部付近にはヨコハケ調整が施されたのであろう。

スカシは全形を知りうる例はないが、円弧の一部が残る例(3・7)があり、円形スカシであることが分かる。

形象埴輪 器種を判別しえない不明形象埴輪片が2点ある。12は板状品で、二辺が剥離面をなす。外面の一面には赤色顔料が一部遺存している。家形埴輪の壁体の一部に相当する可能性がある。これ以外に円筒に粘土板を貼付した個体があるが、天地左右についても判断しがたく、器種は不明である。いずれも胎土・焼成ともに円筒埴輪とほぼ同一といってよい。

所属時期 これらの採集埴輪の所属時期については、①無黒斑窯窯焼成品である、②底部調整を施す、③外面調整の二次調整が省略されている、等の特徴から、川西編年V期：集成編年9期(川西1978・広瀬1998)、近江編年4-a段階(辻川2003)に相当するものと考えられる。

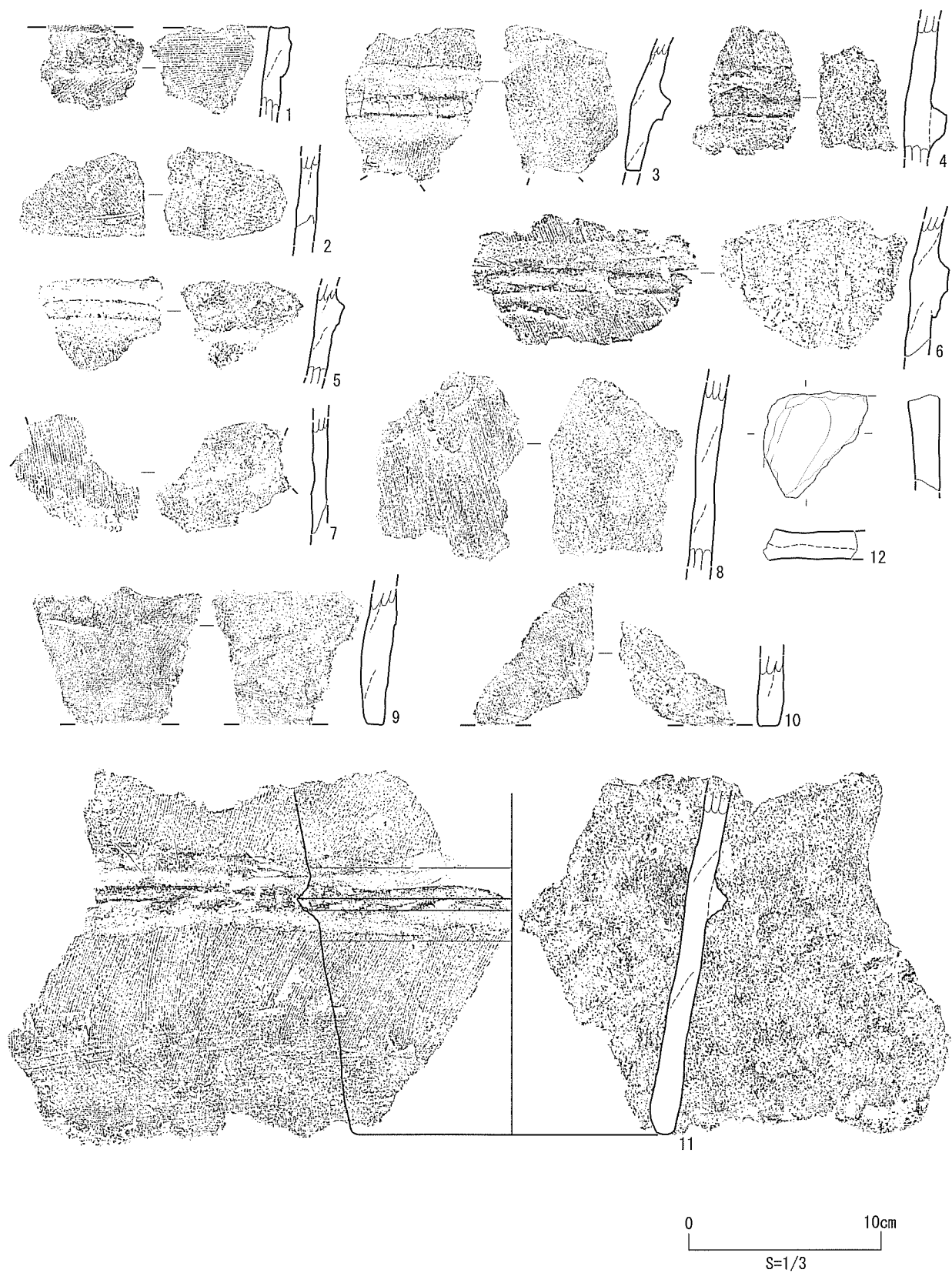


图1 大堀山採集埴輪実測図

4. 出土地の検討 (図2・3)

「大堀山」の所在 『計測表』にある「大堀山遺跡」は、現在の周知の遺跡名称として存在しない。『計測表』にも出土地に関する情報はまったく記入されていない。であるから、「大堀山」という名称から同定を試みるしかないのであるが、幸いなことに「大堀」という地名は滋賀県内では「彦根市大堀町」に所在するのみであった。さらに、彦根市大堀町には「大堀山」と呼称される丘陵が存在していることから、ほぼ当該地点を出土地として考えても大過ないと判断した。

大堀山周辺の遺跡分布 大堀山は、芹川の北岸にある標高155m程度の独立丘陵である。現在のところ丘陵上でも、その周辺を含めても埋蔵文化財包蔵地として周知されているものはない(滋賀県教育委員会編2001)。

大堀山山頂の古墳群 今回、丘陵を踏査したところ、芹川北側の丘陵稜線上において、少なくとも5基の古墳の存在を確認することができた¹⁾。

ここでは、仮に北から順番に1号墳から5号墳まで古墳番号を振り、以下の記述を進めていくことにする。

1号墳 径20m、高さ4m程度の円墳である。墳頂部に南北方向の盗掘坑と思われる凹みが認められる。地表面からの観察では、葺石等の外表施設は確認できなかった。

2号墳 1号墳の南側にある。径10m、高さ3m程度の

円墳である。墳長部に南北方向の盗掘坑と思われる凹みが認められる。地表面からの観察では、葺石等の外表施設は確認できなかった。

3号墳 2号墳の南側に裾を接するように築造された径10m、高さ3m程度の円墳である。墳頂部に南北方向の盗掘坑と思われる凹みが認められる。地表面からの観察では、葺石等の外表施設は確認できなかった。

4号墳 南側に巨大な陥没坑があるため、墳丘の大半が失われている。わずかに北側に墳丘らしき高まりを残している。高まりの裾が円弧を描くことから、円墳になる可能性がある。地表面からの観察では葺石等の外表施設は確認できなかった。

5号墳 南端に位置する。径10m程度と径8m程度の二つの高まりがあり、その間に掘割状の凹部がある。凹部は稜線と直交している。この凹部は南北におおむね直線的に走るもので、人工的な掘削によるとみて大過ないものである。本来、二つの高まりは一体の墳丘であり、その中央部に、おそらくは盗掘による掘削がなされたと考えるのが妥当であろう。また、高まりの裾部が円弧を描くように見られることから、径18m程度の円墳に復元できる可能性がある。地表面からの観察では、葺石等の外表施設は確認できなかった。

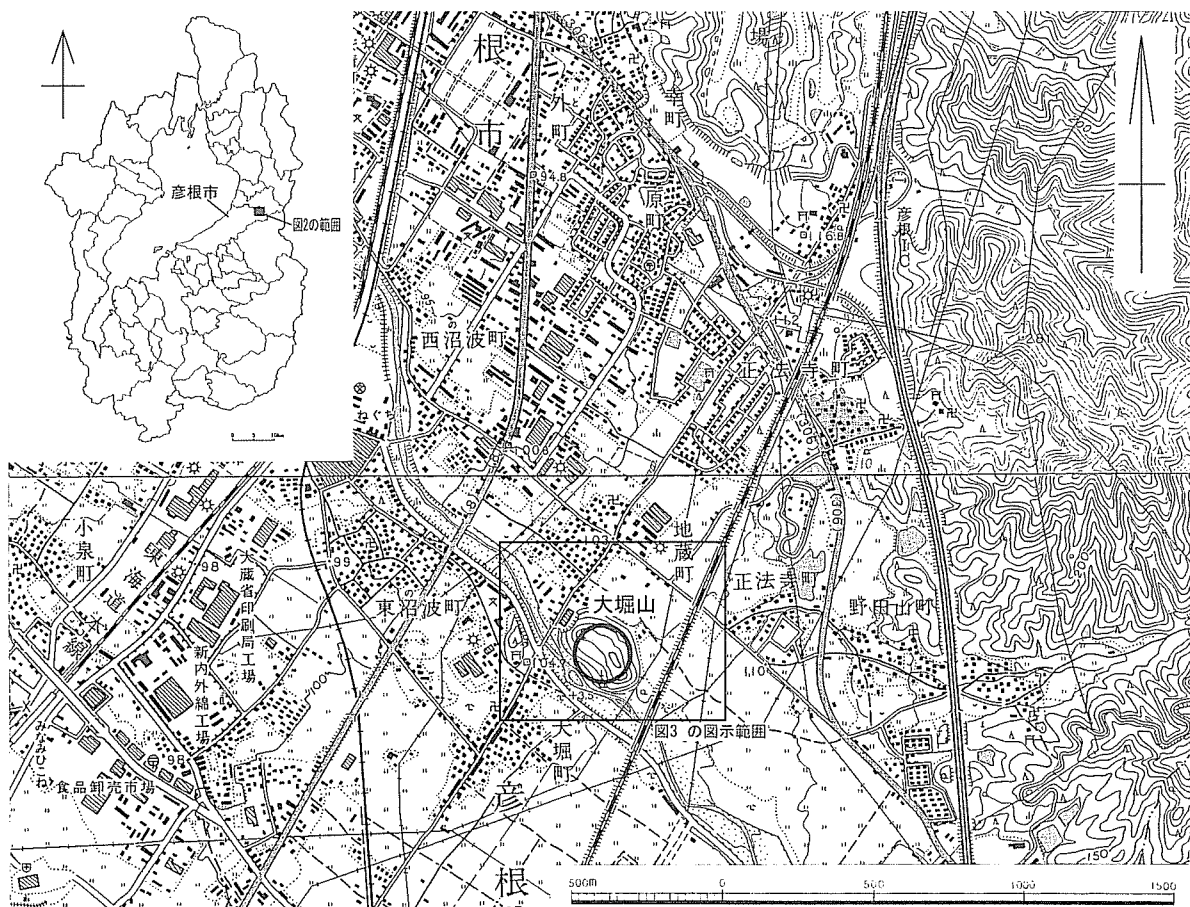


図2 大堀山の位置

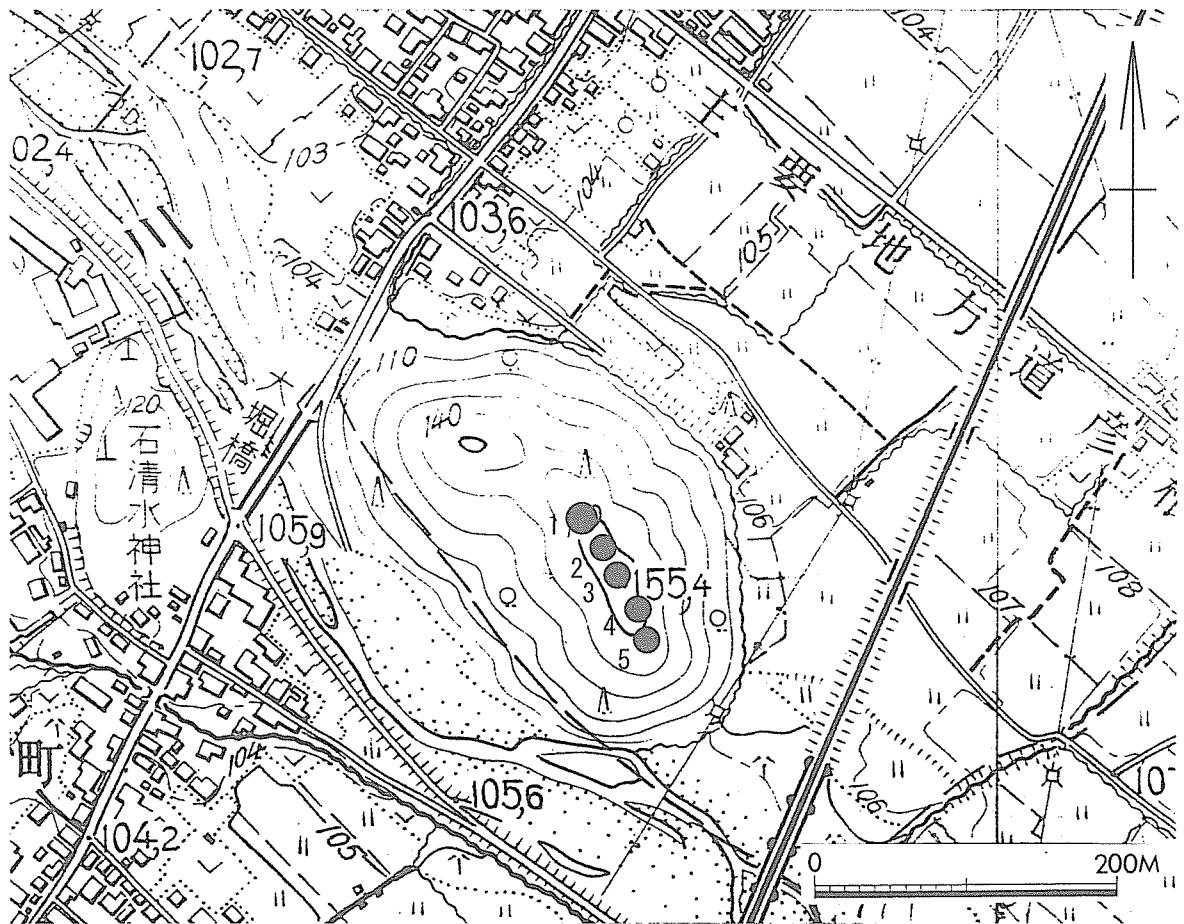


図3 大堀山山頂における古墳の分布状況

5. まとめ

ここでは大堀山山頂部において確認した上記の古墳群を「大堀山古墳群」と仮称しておきたい。いずれも径10～20m程度の円墳であり、埋葬施設やその他の出土遺物を知りえない現状では時期等を知る手がかりを欠いているのであるが、先に報告した「大堀山遺跡出土」とされた埴輪群がこれら「大堀山古墳群」に伴うものである可能性は否定できないと考える。

以上、「大堀山遺跡」から採集されたとする『計測表』の写真に掲載された埴輪資料と対応する埴輪群を見出し、その内容について紹介を行った。また、埴輪の特徴から、これらが古墳時代後期前葉頃に位置づけられるとした。さらに、彦根市大堀山での現地踏査によって、大堀山山頂には少なくとも円墳5基から構成される古墳群（「大堀山古墳群」）が存在することを確認し、埴輪群がこれらの古墳群に伴う可能性を指摘した。

大堀山が含まれる旧犬上郡域は、滋賀県内でも埴輪資料が乏しい地域であり、また後期後半頃には扇状地地帯を中心として大規模な後期群集墳が盛行するが、それに先行する段階の古墳の動向が判然としなかった。換言すれば、古墳動向について詳細を知りたい地域であるといえる。本資料の存在は、少なくとも犬上郡域における後期前葉頃の

埴輪樹立墳の存在を示すものであって、当該地域の古墳動向を知る重要な手がかりとなる。近年当該地域での埴輪資料が微増しつつある⁶⁸ことから、今後当該地域の古墳動向について再検討する必要があると考えている。そのさいには本資料が貴重かつ重要な資料となろう。この点については、稿を改めて検討を期すことにしたい。

（つじかわ てつろう：調査普及課 主任技師）

謝辞

本稿を作成するにあたっては、丸山竜平先生・黒坂秀樹さんからご教示を得た。ご厚意に厚く御礼申し上げたい。また、以下の方々からご教示をいただき、諸機関には資料実見等でご便宜をはかっていただいた。以下に記して謝意を表する次第である（50音順、敬称略）。

内田保之、重岡 卓、田中勝弘、早川 圭、平井美典、藤崎高志、細川修平、滋賀県埋蔵文化財センター、彦根市教育委員会

註

(1) 現地踏査は平成17年11月20日に、重岡 卓氏の同行を得て実施した。

(2) このような後期の「貼付突帯口縁」は、県内では米原市山津

照神社古墳の埴輪（高橋・森下1995）に出土例が認められる。後期段階のこの種の口縁形態は各地に散在的に確認されており、製作集団の系譜を考える手がかりになる可能性がある。

- (3) 彦根市教育委員会による彦根市荒神山古墳の発掘調査では前期後葉頃の埴輪資料が得られている（彦根市教育委員会2005）ほか、彦根市八坂東遺跡では、遊離資料であるものの、中期頃と思われる形象埴輪を含む埴輪群が出土している（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2006）。上流から流入したものと思われ、周辺での埴輪樹立古墳の存在を示す資料である。

挿図典拠

- 図1 辻川実測・作成。
 図2 国土地理院作成1/25,000地形図「高宮」・「彦根東部」をベースマップとして、辻川作成。
 図3 琵琶湖工事事務所作成「琵琶湖周辺地形図19」をベースマップとして、辻川作成。

文献（著者・発行機関名50音順）

- 滋賀県教育委員会編（2001）『平成13年度 滋賀県遺跡地図』
 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2006）『八坂東遺跡』
 高橋克壽・森下章司（1995）「Ⅱ 山津照神社古墳の調査」『琵琶湖周辺の6世紀を探る』京都大学文学部考古学研究室
 辻川哲朗（2003）「近江地域の円筒埴輪編年」『埴輪論叢』4、埴輪検討会
 川西宏幸（1978）「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2、日本考古学会（川西1988に加筆収録）
 川西宏幸（1988）『古墳時代政治史序説』塙書房
 彦根市教育委員会（2005）『荒神山古墳』（彦根市埋蔵文化財調査報告書第36集）
 広瀬和雄（1990）「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社

編集後記

本協会の紀要が今回で20号を迎えました。ようやく成人式を迎えたことになります。これを機会に装丁を一新しました。

今回の紀要の内容は、時代区分では縄文時代から中近世まで、また、遺跡や遺構の評価や再検討を含め、遺物や資料の比較研究から考察に至るまで多岐にわたっています。いずれの論文にも、地域の歴史や文化の成り立ちと変容を解明しようとする熱い学究心が根底にあると信じております。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っております。

(編集担当 M. N.)

平成19年3月

紀 要 第20号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

Tel. 077-548-9780(代)

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

E-mail: mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本 三星商事印刷株式会社